

居座る猛暑

「バス停で10分待っていただけで熱中症になってしまったという人もいた。クリニックを開いて7年目だが、重い熱中症の患者さんが次々来るようなことは初めてだ」

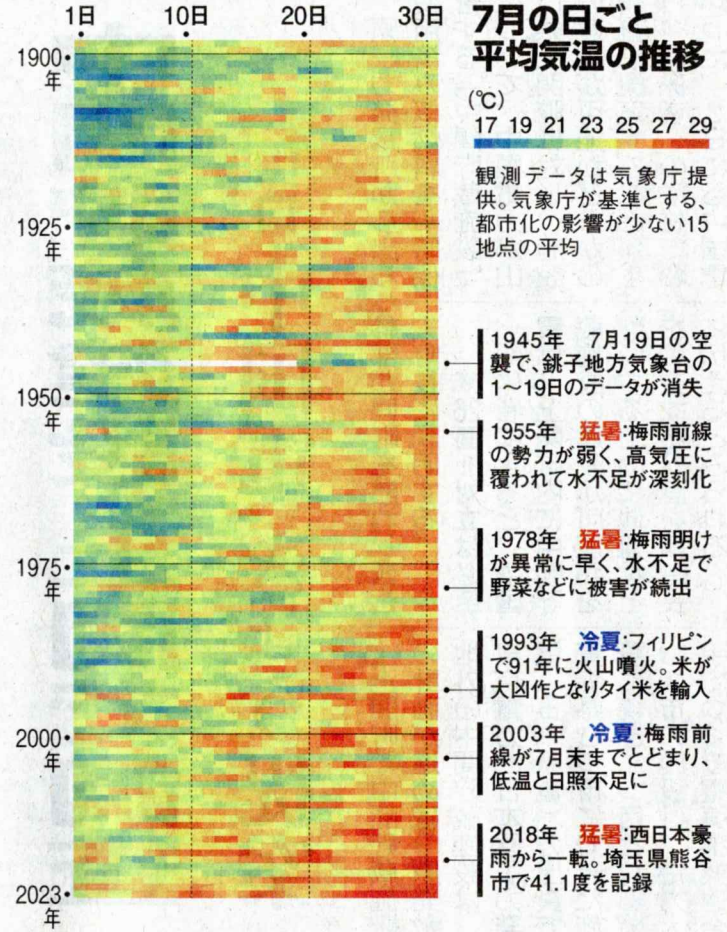
東京都北区の「いとう王子神谷内科外科クリニック」の伊藤博道院長は、7月末の状況をこう振り返った。

気象庁によると、7月の東京は、最高気温が35度以上の猛暑日が13日もあった。これまでは2001年の7日が最も多く、大きく更新した。最低気温が25度以上となる熱帯夜も今年は17日に及び、歴代4位タイになった。激しい暑さで体力を消耗し、夜も気温が下がらないため体が休まらな

1.5℃の約束



▼1面参照

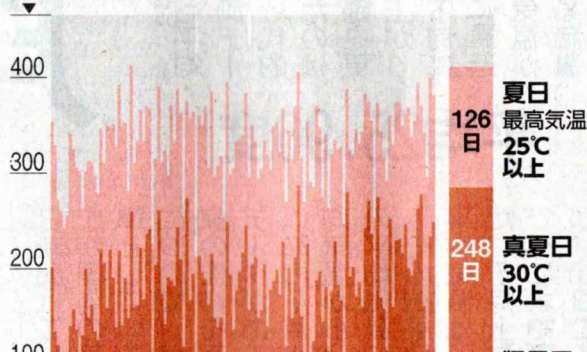


ゼロの年もあった1920年代

2000年ごろから顕著に増加

7月の猛暑日や真夏日の日数

気象庁が基準としている都市化の影響が少ない15地点の合計。例えば10地点で2日ずつ観測されれば延べ20日になる
計465日(15地点×31日)



い構図が見える。「支えられながら担ぎ込まれるような患者さんは、優先して診ないといけな。そうすると、通常の診療はどうなってしまうのか。新型コロナウイルスの大流行していたときのような恐怖感がある」

暑かったのは東京だけではない。気象庁が平均気温を出すときに基準としている都市化の影響が少ない観測所のデータでは、今年7月には猛暑日が15地点でのべ37日、熱帯夜が138日記録された。1920年代は猛暑日がゼロの年もあったほか、熱帯夜も10〜47日しかなかった。

しかし、2000年ごろから顕著に暑い日が増えており、2018年には猛暑日が59日、熱帯夜が146日を記録。昨年もそれぞれ16日と129日あった。

今年も、7月だけでなく、1月以降の上半期全体で平均気温が高かったのも特徴だ。

特に3月は記録的な暖かさで、平均気温はこれまで最も高かった21年の9・99度を大きく上回った。

今年、7月だけでなく、1月以降の上半期全体で平均気温が高かったのも特徴だ。特に3月は記録的な暖かさで、平均気温はこれまで最も高かった21年の9・99度を大きく上回った。

10・36度と開花も早まらな。大阪で、札幌で、日の開花日、16日早くも6月も過去も5位の高温全体の平均14度と、ここ高かった2・02度を更新。近代観測からの126月の平均気温が126度上がった。の影響が大、特にこのトップ10が続いている。

東京、名古屋、福岡の4観測所は126度上がった。ファルトに覆こもりやすくなる。クーラーなどによって気温が上昇してアイランド型気温の上昇傾向とみられる。期の平均気温と、こちらも41度を超えていった。